～「思いやり　支え合い　手と手をつなぐ　大家族たかはま」の実現をめざして～

高浜市総合計画審議会より「中期基本計画（案）」が答申されました

「思いやり 支え合い 手と手をつなぐ 大家族たかはま」をまちづくりのキャッチフレーズとする「第6次総合計画」がスタートして、まもなく3年。社会経済情勢の変化などを踏まえ、新たな課題に対応した市政運営を進めていくため、さまざまな市民の皆さんと「高浜市で課題となっていることは何か」「今後どのようなまちづくりを進めていったらよいか」といった対話を積み重ね、中期基本計画（計画期間:平成26～29年度）の計画案を練り上げてきました。

「第6回高浜市総合計画審議会」（12月18日開催）では、計画案の検討もいよいよ最終段階。11月に公表した計画素案に対して市民の皆さんから提出された意見を、計画内容に反映するかどうかの検討を行ったほか、目標の達成度合いを測るものさしとなる「みんなで目指すまちづくり指標」の目標値について、行政から設定の考え方や達成に向けての決意を発表しました。

最後に、審議会としての「中期基本計画（案）」を決定し、中川幾郎会長（帝塚山大学大学院教授）から、吉岡市長へ答申書が手渡されました。

▲「総合計画審議会」の委員と「中期基本計画策定プロジェクト」のメンバー

答申にあたって

高浜市総合計画審議会　中川幾郎会長

・計画の策定にあたって、行政は大変高い目標を掲げてくださった。厳しい決意を示したことに敬意を表したい。

・「計画」とは、「計測」と「企画」という2つの言葉の合成である。計画を推進するということは、「現状」を統計的に分析して「あるべき未来」を構想し、「あるべき未来」と「現状」の乖離状態を克服するために、エネルギーを注いでいくことである。つまり、行政の仕事には「今のままでいい」というものはなく、常に「改革」が必要である。

・中央集権の時代は「理論を現場化する」、つまり国や県が決めたことを市町村が行うという図式だった。しかし、分権･自治の時代では、現場にこそ新しい理論がある。法や仕組みが合わないのであれば、現場に合わせて変えていくといった「現場を理論化」することが大切である。この「中期基本計画（案）」は、まさに「現場を理論化する」という形で作られたものだと思う。

・高浜市は市民参加･参画が進んでいる自治体だが、まだまだまちづくりに関心を持てない方もたくさんいると思う。中期基本計画の推進においては、そういう方たちも「関わってみたい」と思えるよう、開放性や参加意欲を高める工夫をしていただきたい。

答申を受けて

高浜市長　吉岡初浩

・審議会委員の皆さまには、約1年かけて中期基本計画（案）を審議していただき、本当にありがとうございました。

・各目標の担当部署から「目標を達成するために、このように行動していく」という説明をさせていただいたが、計画は作って終わりではなく、進行管理にも市民の皆さんの目が入る。目標に向かって進んでいるかどうかを、今後、しっかりと見届けていただきたい。

・「問題点があったら、どのように改善するのか」という意識を常に持ち、中期基本計画の推進にあたっては全力を傾注し、掲げた目標、「大家族たかはま」の実現に向けて取り組んでまいります。

問合せ先　市地域政策グループ　☎52-1111(内線332)